

気仙の在宅医療の現場から

退院から看取りまで

岩渕内科医院
岩渕正之

がんの告知について

- 末期がんでも本人に病名を告げるのが一般的
- がんになった時は知らせてほしい: 80,7%
- 家族ががんになった時は知らせる: 40,1%
- 家族、主治医との関係を良好に保つ

がん告知後の気持ちの変化

- 告知後1週間以内
「頭が真っ白になった」～絶望感
- 1～2週間
苦悩、不安、うつ、交互に襲う症状
- 2週間以降1か月～3か月
現実を理解し順応の時期

がん告知後の精神的痛み

- 不公平感: なぜ私が?
- 無価値感: 家族や他人の負担にはなりたくない
- 絶望感: そんなことをしても意味がない
- 孤独感: 誰もわかってくれない
- 刑罰感: 何も悪いことはしていないのに

家族の希望

- 大切な家族の病気が治らないことを受け入れるのはとても辛い、でも残された短い時間を自宅でゆっくりすごせるのなら本人の願い通りにしてあげたい

家族の不安

- 家族としてどのように支えれば良いのか？
- 仕事や家事は？
- 痛みや飲めない食べられない時が来たら？
- 苦しみに対して何をしてあげられる？

在宅医療への移行のために(1)

- 医療側との窓口となる家族を決めておく
- 遠方在住の親族にも緩和医療を含めた治療方針を決めておく
- 介護者が独りで抱え込まないようにする

在宅医療への移行のために(2)

- 環境の整備：部屋を決め、ベッド等の用意
- 介護保険
- ケアマネージャー、訪問看護師、在宅医の選定

がん在宅療養開始後におこること

- 介護者との葛藤
- 飲めない、食べられない
- 腹水や胸水の増悪
- がんによる痛み
- 褥瘡の出現

介護者との葛藤

- 介護者
どうしても病人として扱ってしまう
- 患者さん
食べたくないのに無理に口に入れようとする、
薬なんて飲みたくない
↓
結局、自分の辛さを理解してくれない

飲めない 食べられない

- がん終末期になると身体が食事を要求しなくなる
- 腹水が溜まると食欲が低下する
↓
- 腹水は可能な限り吸引する
- 点滴は経静脈ではなく持続皮下注を少なめの量で

がんによる痛み

- 積極的に医療用麻薬を用いる
- 意識低下をおこさないで痛みを取ることは十分可能
- 状態に応じて内服薬、貼付薬、注射薬を使い分ける

医療用麻薬の誤解

- 1) 中毒になるのが怖い
→痛みがある状態での使用は中毒にならない
- 2) 「麻薬」という名前の響きが怖い
→ニュース等の事件性があるものとは違う
- 3) 眠りから醒めないのでは？
→適正量で使用すれば眠気は出ない

看取りが近いときの症状

- 飲んだり食べたりしなくなる
- 「亡くなった人に会ったなどと言う」
- 意識が無くなっても聞こえている
- 手足が冷たくなる
- 喉が鳴る
- 下顎で呼吸をする

下顎呼吸

- 看取りの前におきる呼吸
- 胸の呼吸ではなく顎で喘ぐような呼吸
- 見た目は苦しそうな印象

症例

- 80代女性、夫とは7年前に死別、長男と同居
- 3年前に胃がんで胃全摘除術施行
- 維持治療は抗がん剤の内服
- もともとあった認知症が悪化
- 1年前にリンパ節への転移が見つかる
- 続いて肝臓、他のリンパ節転移発症

- この時点では生活能力は保たれていた